

私の未来を創るおかね

京都府・与謝野町立江陽中学校 3年 河嶋 春香

「それが春香の本当にやりたいことなら、貧乏になったっていいやん」
母にそう言われたとき私はすごく驚いた。

なぜなら、私は幼い頃から両親に、お金がいかに大切なものか口すっぱく言われていたからだ。

私の両親はすごくお金に厳しい。初めてまとまったお小遣いをもらったのは中3になってから。それまでは、お年玉しか自分の自由になるお金はもらえなかった。本や雑誌を自由を買っている友達を見ると羨ましくて、買えない自分が惨めで、何で自分だけといつも思っていた。みんなもらっているといっぴり泣いてせがんだこともある。だが、両親は「よそはよそ」と言っぴり全く取り合っぴりくれなかった。物を買っぴりもらえるのも、誕生日とクリスマスだけ。文房具は無くしたら自分のお金で買うというルールもある。

もちろん両親自身の身の回りの儉約も徹底したものだ。私は両親のそういうケチケチした態度が嫌だった。特に、穴のあいたパジャマをいつまでも着ているのはみっともなくて嫌で嫌で仕方がなかった。しかし、それでも両親がとっぴりもお金を大切にする人達なのだといっぴりことはそういう行動からひしひしと伝わっぴりてきていたし、お金がないとどんなに大変かといっぴりことはよく言われていた。

だから、私は長い間自分が作家になりたいといっぴりことを言えなかった。作家といっぴり職業は、売れなければ収入はゼロ。金銭的に苦勞することは目に見えている。そんな職業をこれだけ「お金」といっぴりものを大切にする両親がよしとするとは思えなかったのだ。

私が、初めて両親に作家になりたいと話したのは、学校で進路の調査が始まった頃だった。猛反対されるだろうと覚悟していたのに、意外にも全く反対されなかった。でも、文学部に行きたいといっぴり言うと

「わざわざ文学部に行かなくても、理系でも作家にはなれるんだよ」

と言われた。そして、学校の先生にも

「今は、文学部出身じゃない作家さんもたくさんいるし、別に文学部にこだわらなく

でもいいんじゃないか」

と言われた。だから、そのときはやっぱり理系に行って資格をとった方が得なのかな
と思い、薬学部に行って、薬剤師の資格をとれば、安定した収入が得られて作家も目
指しやすいはずと自分を納得させた。

しかし、少しずつ時間がたつにつれて、やはり何かしっくり来ないものを感じるよ
うになってきた。私がやりたいことは、薬の研究じゃない。文学の研究だ。なのに、
薬学部に行くのはなんだか間違っているのではないか。そういう思いが自分の中で大
きくなってきていた。そして、私は、作家になりたいから文学部に行きたいのではなく、
文学が研究したいから文学部に行きたいという自分の気持ちを再認識した。でも、や
はり両親には言いにくかった。資格も取れない文学部を出て作家を目指すなんて、今
度こそ反対されるだろうなと思っていたからだ。

しかし、両親は今度も反対しなかった。それどころか、「貧乏になるかも……」と
不安そうに言う私を励ましてくれた。

「それが春香の本当にやりたいことなら、貧乏になったっていいやん」

と言って。

「お母さん達がケチケチしてお金を貯めているのは、春香達を行きたい高校や大学に
行かせるためなんやで。春香の好きなことをやんな」

そう言ってくれたときはすごく嬉しかった。

「春香達が進学するために貯めている」それは何度も何度もことあるごとに言われ
た言葉だ。でも、嬉しいと思ったのはこれが初めてだった。

私はいつも目先の欲にとらわれていて、両親の本当の優しさを分かってい
なかった。確かに両親は物やお金は与えてくれなかった。しかし、両親はそれよりもっ
と素敵な「将来の自由な選択」というものを用意してくれていた。

子供にお金の価値を分からせて、大学進学のための資金を貯める。それは、お金を与える
よりよっぽど大変なことだろう。でも、私の両親はそれをやってくれていた。パジャ
マも買い換えず、私達のためにお金を貯めてくれている両親を、このとき初めて尊敬
した。そして、感謝の気持ちでいっぱいになった。

私の夢は、まずは高校に合格して、一生懸命勉強して国立大学の文学部に入ること。
そしてどんなに貧乏になっても、あきらめなくて、作家になることだ。そして、いつか、
自分の書いた作品でお金が稼げるようになったら、そのときは両親にそのお金で買った
新しいパジャマを贈りたい。今は照れくさくて言えない「ありがとう」の言葉を添
えて。